集落の話の聴き手だより

第2号
2023.08

―馬と共にあった暮らし―

昨年度の聴き取りのなかで、「飲んで家に帰る時も、馬が勝手に家へ連れて帰ってくれた」など馬の話は印象深く、話してくださる方々の熱い想いを感じました。そこで今年は馬との暮らしを聴き取るテーマの一つにしています。今回は上区新田の三井さんから伺ったお話の一部をご紹介します。

写真を引き伸ばし額装されている
馬に乗る三井国貞さん

今も残る馬との生活

私たちが到着してご挨拶をすると、三井さんは笑顔で迎えてくださいました。
「ここが馬小屋だったんだよ。」と案内された場所は、馬を飼っていた頃からあるという馬の絵が描かれた絵馬が飾られており、今もまだ馬小屋の面影が残っています。この窓から馬が顔を出していたのだろうかと想像を膨らませ、胸が高鳴りました。

さらに、馬との生活を感じられる馬具を納屋から出してきてくださいました。その中には蹄鉄（ていてつ）やハミ（馬の口に含ませる道具）等がありました。

蹄鉄については、一度は捨てようと思ったが、「家の入口に置いておくとお金が貯まる」といういわれもあるそうで、縁起を担いで飾ることにしたそうです。確かに蹄鉄は、「ラッキーアイテム」として知られています。

馬小屋だった部屋に
飾られている絵馬

蹄鉄の交換も自分たちで

三井さんの父、国貞さんは馬の爪が伸びると、ご自分で蹄鉄交換をされたそうです。熟練の技術が必要な作業だと知り驚きました。そこで、どんな作業なのか詳しく聞きたいと、手順を教えて貰いました。

まずは、蹄鉄を外して囲炉裏に入れて真っ赤になるまで熱する。そして馬の爪を切り、先程の熱した蹄鉄を切った爪にジュ―っと押しあて、その後専用の釘で打ち付ける。爪なので熱くはないのだそうです。

蹄鉄（ていてつ）

蹄鉄交換の間、子どもたちの手伝いといえば、馬のお腹に寄ってくるアブを追い払うこと。アブが寄ってくると馬が嫌がり、暴れて蹴られると危険なので、うちわで扇いで追い払うように言われたそうです。もし、釘の先端が出ている状態で暴れたら馬も周りも大惨事です。アブを追い払う作業も、大事なお仕事だったに違いありませんね。

こちらに記載した話は、ほんの一部です。他にも、馬との生活や馬搬（土曳（どび）き）、馬耕の話などもお伺いしました。それらは、インターネットの『集落の話の聴き手公式note』にてまとめておりますので、下記QRコードよりぜひご覧ください。

さくほ集落の話の聞き手 公式note
https://note.com/sakuhosyuraku

活動進捗

「方言を将来世代に」

昨年度私たちは聴き取りのなかで沢山の言葉に触れ、イントネーションや言葉の使い回しに魅力を感じ、これを将来世代に伝えたいと思いました。そこで今年はサロンなど地域の集まりにお邪魔し、方言をテーマにした聴き取りと桃太郎の物語を方言に直して動画に残す活動を行いました。

そこでは日頃意識しないで使っていると戸惑いながらも、おばあさんが桃を運ぶ際「大変だよなぁ。洗濯物をびしゃる（捨てる）か」と物語に描かれていない場面も飛び出すなど活発なやり取りが行われました。活動の様子や完成した動画は公式noteから見られますのでぜひご覧ください。

募集

現在の佐久穂町内で撮影された「古い写真」を募集中！

地域の古いお写真とエピソードを募集し、3月に茂来館にて写真展を開催予定です。カメラも珍しい時代の写真は、その時代を知るとても貴重な存在です。

時期 おおよそ大正12年頃～昭和30年代位

内容 日常的な風景や景色でも構いません。

お写真をお持ちの方をご紹介くださっても結構です。
お写真をお持ちの方はぜひご連絡ください。

柳沢と人の暮らし

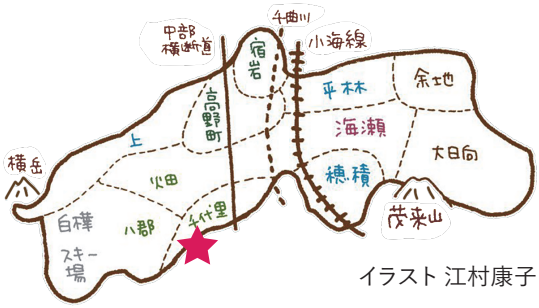

イラスト 江村康子

馬越集落を通り過ぎ、緩やかではあるが細い坂道を1キロほど上ると、視界が開けた場所に出る。柳沢集落だ。13世帯の小さな集落で、峰を挟んで鷹ノ巣に6軒、そのうち3軒が酪農を営んでいる。柳沢には7軒、そのうち2軒が有機農業家である。若い世代が暮らしているので、子供の数が多い。中学生を筆頭に1歳児まで8人いる。そのため、高齢者割合率や人口減少率が低い。

酪農を営む篠原拓未さんは30代の若い区長さんだ。酪農家の家に生まれた3代目である。跡継ぎになるという意識はなく、高校3年生の時、進路を考えて、酪農家になると決心した。北海道の酪農大学で実践を学び、柳沢に戻って、酪農家として独立して10年になる。

佐久穂に若い酪農家が増えた

妻の寛子さんも酪農の仕事を手伝っているが、まだ子供が小さいので、補助的な仕事しかできない。「柳沢は行き止まりの集落なので、車の往来が少なく、安心して子供が外で遊べる。それに小さい集落特有の誰もが知り合いなので、気軽に声を掛け合うことができるので、嬉しい。」

篠原沙保さん（篠原洋平さんの妻）は下伊那郡松川町出身。牛が大好きな働き者。毎朝5時に起きて、他の酪農家で7時までアルバイト。その後、家の酪農仕事をする。今まで、2回牛の後足で蹴られたことがあるという。牛は120頭飼っている。沙保さんも、柳沢は車の往来が少ないので、子供が伸び伸び遊べるので、安心という。

篠原拓未・洋平兄弟の大先輩である篠原美紀夫さんは酪農歴40年のベテランである。「じいさんが牛を1、2頭飼っていた。親父が酪農補助事業の支援を受け、酪農経営を始めた。そのあとすぐに、親父が亡くなったので、あとを継いだ。3代目としてしっかり土台を築いたという自負はある。規模を拡大して、経営を軌道に乗せているからこそ、若い人たちが後に続いてくれる。」

農業を営む篠原晴義さんは、開拓で入植した3代目。大正中頃から昭和の初期にかけて入植した人たちで作った開拓集落である。「開拓地の風土かもしれないが、外からの人を受け入れることにそれほど抵抗感はない。柳沢で生まれて、育った影響かもしれないが、都会に出て働いたが、ここは自分が住むところではないと感じてた。柳沢に帰ってきて、土を見た時はほっとした。自然が周りにあると、気分が沈んでいても大きな青空を見ると、元気になる。緩やかな丘陵地帯だから、空が広く、陽当たりがいい。」

有機農業をしている森本健・有紀子夫妻は子供が4人いる。健さんは、「柳沢の空気感が好きだ。町場まで15分で行けるし、帰ってくれば、自然が溢れた家がある。こんな贅沢はないと思う。車社会の恩恵を十分受けているが、受動的ではなく、むしろこちら側が車社会を利用している能動的な関係を作っている。スクールバスも来るし、不便さは感じない。街路灯もあまりないので、星空がきれいに見える。」

兵庫県出身の森本有紀子さんは、「朝の7時半から家事、育児、仕事がはじまる。ヤギ5頭を飼っていて、乳搾りをしたり、それでヨーグルトを作る。柳沢は住みやすく、環境がいい。周りの人もいい感じに受け入れてくれた。自営業が多いので、一人一人が面白い、個性豊かだ。好きなように生きている。」

のびのびと育つ子供たち

集落の話の聴き手だより
第2号
2023.08

発行・問合せ：佐久穂町役場　総合政策課　政策推進係
TEL.0267-86-2553　〒384-0697 長野県南佐久郡佐久穂町大字高野町569番地